

健康文化

がん予防学雑話(3) 胃がん死亡は何時になったら心配でなくなるか

青木 國雄

1960年頃よりわが国の胃がん死亡率が減少し始めた。わが国は胃がん対策が他国より強化普及しているので、次の世紀のはじめには死亡率が米国なみの10万対10以下に低下し、心配が少なくなるのではないかと期待されていた。現在が10万対50前後であるので1/4あるいはそれ以下になるからである。すでに発表された統計学的予測値の中には、もっと低くなる推計もでていいる。果たしてそうなるであろうか。

米国白人(米白人)、England-Wales(英国)、カナダおよび日本の男性の1960～80年の20年間の胃がん死亡率の減少速度を計算してみた。米白人は45.5%、英国は41.3%、カナダ81.8%、そして日本は28.6%であった。予想に反して日本は減少速度が遅かった。胃がん検診の効果が少し遅れてあらわれると考えて1970年から1990年間の減少率でみると、40%前後になったが、それでも英国なみである。

一方日本人の出生コホート別の年齢別死亡率曲線を見ると、1970年前後から、他の国々にはみられない減少傾向が認められるので、やはり胃がん対策の効果があらわれ始めたと考えている。

米白人は戦前の1920年から1960年の40年間に63%減少、英国は1930年から1970年の40年間に48%減少しており、これは医療以外のライフスタイルの変化によるものと考えられ、予防の効果が大きかったことがわかる。ちなみに日本の1920～1943年間は30%以上増加していた。

米白人と英国の男は昔は死亡率にそれほど大きな差があったとは思われない。前世紀後半からのいろいろの社会経済条件の差で、30年くらいの胃がん死亡率の減少度に格差が生じたのである。米白人は1860年生まれのコホートで減少が認められるので、それ以前の出生コホートから減少が始まったと考えている。

1846年に米墨(メキシコ)戦争があつてカリフォルニアやニューメキシコが

米国の領土となり、1961年から南北戦争が始まっている。近代工業や鉄道網も広がり、経済成長の著しい時代であった。こういう時代に入るとどの国も胃がん死亡率が減少してくる。一方英国も世界の雄であったが、18世紀後半の経済は一進一退であった（著者には意外であったが）ので英国の労働や食習慣はこの期間に米国ほど変わらなかったことを示唆している。

1820年代から米国は大量の移民を受け入れ始めた。1840年には年間約100万人、1850年は300万、1880年は500万、1900年には800万をこしている。殆どが白人で若年者が多く、出生率も高いので米国人口は1820年から90年間に10倍となり、次の50年間に2倍と増大した。若年者の増加は胃がん死亡率の減少を加速するし、米国社会の高齢化の速度を遅らせた。どの国も高齢者は胃がん死亡数は極めて高いので、高齢者人口の増加が遅れば胃がんの減少を加速するわけである。

一方英国は移民の数が少なく出生率は低くなり、高齢者の割合が年々高くなった。当然のことながら減少傾向にある胃がん死亡率低下を鈍化させるのに一役買ったわけである。カナダの戦後の著しいがん死亡率は社会経済環境、教育の普及の他に、移民の影響があったこともがん登録記録から伺われる。

一方わが国は移民は殆どなく、出生率の低下と共に人口の高齢化は世界一速いテンポで進んでいる。減少速度が遅いのは当然かもしれない。

わが国の都県別の胃がん死亡率を見ると、減少速度が少しずつ異なっている。1960年代に高率な地域は東北各県と奈良、低率なのは鹿児島など南の県に多く、東京都は中間である。愛知は全国平均よりやや低い。1970年から1990年の20年間の減少率は、秋田46.8%、鹿児島42.8%、東京44.6%で大差はなく、全国均等に減少していることが分かる。奈良は若干異なっており51.3%で高く、とくに1980年までの減少が著しかった。この原因の一つは奈良県内で大阪のベッドタウン化した地域に若い年齢層が多数流入したことがあげられる。もっとも1980年以降減少傾向は他と変わりはなくなった。

ハワイの日系人男性は1860年前後から移民が始まっているが、当時の日本人の胃がん死亡率は10万対40～50の間と推定されている。移民後胃がん死亡率は上昇し、1930年には10万対100前後と高い死亡率を記録している。生活条件が悪かったのであろう。その後は急激に減少した。減少率は30年間に70%で白人の率と似ていた。これは前述の20年間40%前後の減少率より大きい。

わが国の将来の胃がん死亡率を予測するため、今後20年間に40%ずつ減少

すると仮定して計算すると、2040年に10万対14、2060年に8.6となり、目標の10万対10以下となる。このレベルなら余り国民は心配することはない。

日本の長期変動を米国のそれと比べると80年くらいの時代の差がある。胃がん問題は日本人にとって今後もかなり長く続くことを示している。一日の塩の消費量が最近わが国で12.5g/人で、減少傾向から再び上昇したことは胃がん減少を遅らせるのではないかと心配の種である。胃がんの大きな危険要因の一つであるからである。

死亡率の著しい減少にも拘らず罹患率の低下がゆっくりしていることである。大阪のがん登録でみると罹患率の減少は死亡率より10%くらい低い。山崎らの将来予測では胃がん患者数は少なくとも2000年までは増加し続けるという。医療の進歩で死亡者数は減少するので両者のギャップは年々大きくなることが予想される。しかし患者数が減らなければ医療は全く手をぬくことは出来ないことを知っておく必要がある。

まとめてみると胃がん死亡率は上昇、ピーク、下降の流行病のような消長を示す。このことはいわゆる環境がんは時期が来れば減少することも示唆している。

病気の疫学像の年代的なずれは、各国、各地域の社会経済状態の変化と密接に関連している。19世紀以降開発が遅れた国や地域ではがん死亡はこれから増加をするわけであり、たとえ先進国で減少しても途上国が増加するので世界的にみると今後100年以上いわゆる流行が続くように思われる。

(愛知県がんセンター総長)